

霊的な闘いに関連する「立つ」行為について

伊藤明生

キリストと世界 30 号抜刷 2020.3.1

霊的な闘いに関連する「立つ」行為について

伊藤明生

(東京基督教大学神学研究科教授)

はじめに

「破れ（口）に立つ（עמד בפרץ）」¹という表現は、旧約聖書で詩篇 106 篇 23 節とエゼキエル書 22 章 30 節の 2 箇所に見出される。詩篇 106 篇では、憤ってイスラエルの民を根絶やしになさろうとした神の御前で、モーセが「破れに立った（עמד בפרץ）」ので、神がその憤りを鎮めたことが謳われている。エゼキエル書 22 章では、「この地」が滅ぼされないために、「石垣を築き、破れ口に立つ者（גִּדְרֵי-נֶדֶר וְעַמְד בַּפֶּרֶץ）」を探したが、見つからなかった、と主は語っている。同じ「破れ（口）に立つ」²という表現であるが、両者の文脈が異なるために、微妙に意味合いが異なる。前者の箇所に比べて、後者の箇所の方が状況も意味も具体的で、意味を把握することが比較的容易である。神の都エルサレムが敵国バビロンの軍勢に攻められて今にも陥落しかねない状況で、敵軍の攻撃から都を守る方策がエゼキエル書 22 章では話題となっている。ここでの「破れ口」とは、エルサレムの城壁が破れているところで、城壁の破れを修復することが間に合わないので、敵の軍勢が城内に侵入することを少しでも妨げるために破れ口に立って都を死守する状況が思い描かれている。このような状況描写の延長線上に詩篇 106 篇 23 節も位置付けることができる。つまり、神の民イスラエルを根絶やしになさろうとする神の憤りは、神の民の中でもっとも罪深く弱い「破れ」に向けられているが、モーセは神の御前に神の民を執り成そうと「破れ」に立っている。このように、同じ表現が異なる文脈で戦いと祈りと全く異なるものを描写するために用いられている。確かに戦いと祈りは異なるものであるが、祈りが霊的な闘いであることに着目すると、どちらも戦いであることには違いがない。祈りは宗教的な行為で、戦いは戦闘行為と余り相違を強調しない方が良いかもしれない。

1 本稿で新約聖書から引用する際には筆者の私訳を用いている。

2 動詞の語形は異なる。

「破れ（口）に立つ」とは、キリスト者の間で時折、耳にする表現であるが、旧約聖書で見出される2箇所です。既に意味合いが微妙に異なっている。エゼキエル書22章の文脈の方が具体的な状況に根差した表現で、詩篇106篇は比喩的な表現である。そのような相違が「破れ口」と「破れ」という新改訳2017版の訳語の相違にも表れているのかもしれない。それでは、その破れ口に「立つ」とは一体何を意味するのであろうか。「立つ」とは、人間であれば二本の足で立つ動作を指すことは言うまでもない。「立つ」というような基本的な動作を言い表す動詞であっても、特定の時代や文化や慣習や文化脈や状況によって、その動作が不適切であると判断されたり、最善の方策と考えられたりする。例えば、町が敵軍に包囲されて攻撃されている状況下で、城壁に破れが生じれば、その破れを修復することが何よりも急務である。しかし、だからと言って、その破れ口に立つことが妥当な対処法であると通常、現代人は考えない。祈りが霊的な闘いであると考え、祈りながら立つ様子は聖書で見出される。同時に、旧約聖書で主の戦いという表現で典型的に言い表されているように、文字通りの戦争であっても主が戦うという霊的な側面が聖書では認められていることも見逃してはならない重要な点かもしれない。

本稿では、旧約聖書の「破れ口に立つ」を出発点として新約聖書で「立つ」という行為が霊的な闘いとの関連で用いられている2箇所を考察する。その2箇所とは、「神のすべての武具」が列挙されているエペソ人への手紙6章10節以降とコリント人への手紙1章27節である。その2箇所を見る前に、先ず古代のギリシア語文献で戦場の戦闘行為として「立つ」という動詞が用いられている箇所、そして旧約聖書で「主の戦い」に言及される箇所を確認しておく。

戦場で「立つ」とは？

兵士たちが戦闘の最中の戦場で立っている姿は、私たちの目には奇異な光景と映るかもしれない。戦闘で、兵士たちは立つのではなく、匍匐前進するイメージが私たちの脳裏に焼き付いている³。戦争とは勝つために戦い、そのために兵士たちは一人でも多くの敵兵を殺戮したり、生け捕りにしたりすることが求められる。そして、同時に自らの身の安全を守ることも重要である⁴。すると、どのような兵器や武具や

3 戦場を実体験したことのない私たちの多くが同じイメージを抱くことに改めて驚きを禁じ得ない。やはり視覚に訴えかけるメディアの影響力が絶大なのであろうか。

4 過去の大戦で、この視点を度外視した作戦を敢行した旧日本軍の愚鈍さは、ここで今更

戦略を用いるかと同じように、兵士たちが戦闘の最中にどのような姿勢を取るかは戦争を勝ち抜くために重要であり、使用される兵器や武具の種類によって異なることは容易に想像できる。古代の場合には、剣、槍、弓矢が主な兵器で、後代になって初めて火薬を用いた飛び道具が戦場に導入されて兵器の主流となった。命中率の高い銃器が戦場に導入されれば、兵士たちが立っていれば格好の標的となるが、古代の戦闘では、そのような心配はほとんどなかった。弓矢が届く範囲は限られ、風などに左右されて命中率も決して高くなかった。戦場で兵士たちが立っている描写の例として、以下のギリシア語文献の箇所を挙げることができる。そして、そのような描写で基本的に「立つ」とは敵前逃亡するのではなく、戦線に踏み留まって死守する行為を指していた。

クセノポン『アナバシス』巻1第10章1節

キュロスが死んでその首と右手が切り落された。大王（とその部隊）は追撃してキュロスの陣営に突入したが、アリアイオスの部隊はもはや踏み留まろうとせず（οὐκέτι ἴστανται）、自分の陣地を通過してその朝発進してきたばかりの、前日の宿営地指して 逃走した（φεύγουσι）。その距離は四パラサンゲスであったという。⁵

直訳では「もはや立っていない（οὐκέτι ἴστανται）」となるが、「逃走する（φεύγουσι）」と対照的な行為であるので、「もはや踏み留まろうとせず」と訳出されている。

クセノポン『アナバシス』巻4第8章19節

さてギリシア部隊が駆足に移ると、敵は踏み留まることができず（οὐκέτι ἔστησαν）、思い思いの方角へ散り散りになって逃走した（ἀλλὰ φυγῇ ἄλλος ἄλλῃ ἐτράπετο）。ギリシア軍は登頂を果たした後、豊富な食糧を貯えている多数の村落で宿営した。⁶

前の箇所とはほぼ同じ用例で、直訳では「もはや立っていなかった（οὐκέτι

指摘するまでもない。

5 クセノポン『アナバシス—敵中横断 6000 キロ』松平千秋訳、岩波文庫、1993 年、61 頁

6 クセノポン『アナバシス』198 頁

ἔστησαν)」であるが、「思い思いの方角へ散り散りになって逃走した (ἀλλὰ φυγῇ ἄλλος ἄλλῃ ἐπάπετο)」と対照的な行為であるので、「踏み留まることができず」と訳出されている。

クセノポン『ギリシア史』第5巻2章23節

これらが決議されると、アカントス人使節団は再び起立して、決議は結構至極であるが、速やかなる実行は不可能だ、と指摘した。したがって、準備が整えられている間に、指揮官、および直ちに攻撃できる程度の兵力が、ラケダイモンと他の諸ポリスからできるだけ迅速に派遣されるべきだ、と彼らは主張した。もしこの措置がとられるなら、これまで敵についたことのないポリスはわが陣営に留まる (στέῃναι) であろうし、強制されて敵陣に入ったものは敵にとって恃むに足りない同盟者となるであろう、と言うのである。⁷

「立つ (στέῃναι)」という動詞が敵方に寝返ることと反対の意味で用いられているので「わが陣営に留まる」と訳されている。

トウキュディデス『ペロポネソス戦争の歴史』第5巻101-104章

101 アテナイ使節「いや、冷静に熟慮すればそうではない。なぜなら、今諸君が臨んでいるのは、卑怯の謗りを退け、勇敢さを誇るための、双方が同じ条件で争われる競技の場ではなく、自分よりもはるかに強い相手に立ち向かうのをやめて、我が身の安全をはかるための審議の場なのだから」。

102 メロス委員「とはいえ、戦争の行方を決めるのは、双方に差のある兵員数ではなく、双方が平等にもつ運である場合も少なくないことを、吾々は知っている。それに、すぐさま屈服しては希望の余地もないが。行動を起こせば、そこに自分の足で立つ希望が残されている (μετὰ δὲ τοῦ δρωμένου ἐτι καὶ στέῃναι ἐλπίς ὀρθῶς)」。

103 アテナイ使節「希望とは危機の中の慰めであり、力の余裕を持ちながら希望を楽しむ者は、そのために傷つくことはあっても、破滅に導かれることはない。だが、手持ちのすべてを希望に賭ける者は、破滅に至って初めて、希望というものが高価な代償を要求することに気づくのだが、気づいたとこ

7 クセノポン『ギリシア史 2』(西洋古典叢書) 根本英世訳、京都大学学術出版会、1999年、25頁

ろでそれから身を守るための力はもはや残されていない。風向きひとつに身を任せる、はかない存在である諸君は、けっしてそのような境遇に身を委ねてはならない。そして、人間の行為によって助かる道がまだ残されているにもかかわらず、目に見える方策には希望をかけず、苦しまぎれに、予言や神託など、希望によって人を破滅させる、目に見えないものにすがろうとする愚かな民衆の真似をしてはならない」。

104 メロス委員「諸君の持つ力と運に対抗することは、同じ力と運に恵まれない限り困難である。それが事実であることは吾々も承知している。しかしながら、まず運について言えば、敬虔な者が不正な者にこうして向き合っているのであるから、神の配慮は吾々の方に厚いと信じる。次に力については、その不足はラケダイモンとの同盟が補ってくれるだろう。彼らは、たとえ他の理由はなくても、同族の誼みと体面重視の気質から、吾々の救援に駆けつけざるをえないはずだ。だから吾々の自信は、諸君の考えるほど、根拠のないものではない」。⁸

戦争に勝つことが「立つ (στῆναι)」と言い表されていることは興味深い。

「主の戦い」

旧約聖書でも兵士たちは戦いに際して立っている様子が描かれるが、同時にイスラエルの神主がイスラエルのために戦うという考え方も見出すことができる。文字通りの戦闘行為であっても、主の戦いであると考えると霊的な領域にも属していることになる。すると、文字通りの戦いと霊的な闘いとの境界は限りなく不鮮明なものとなる。出エジプト記 14 章 13・14 節では、兵士たちが戦場で戦っている様子が描かれているのではなく、モーセが率いてエジプトから脱出したイスラエルの民をファラオが戦車部隊を率いて追撃してきた状況である。前には葦の海、背後からはファラオの軍勢が追跡して来る状況でイスラエルの民は恐れおののいている。そういう民にモーセは語りかけている。戦闘場面ではないが、戦闘を間近に控えた戦場での状況に酷似している。

8 トウキュディデス『歴史 2』（西洋古典叢書）城江良和訳、京都大学学術出版会、2003 年、79-80 頁

モーセは民に言った。「恐れてはならない。しっかり立って (יָבִיטְהוּ סִתְּתֶה)、今日あなたがたのために行われる**主**の救いを見なさい。あなたがたは、今日見ているエジプト人をもはや永久に見ることはない。**主**があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい」。

ここでいう「**主**の救い」とは、エジプトの軍勢から救い出されることに他ならない。**主**がイスラエルのために戦ってくださるので、イスラエルの民は何もしないで黙っていればよいと語られる。言い換えると、イスラエルの民が自分たちの**神主**を、そこまで信頼することができるかどうかが問われている。戦いのために祈り、祈りが戦いの結果を左右するとは、イスラエルの戦いが**主**の戦いであるという理解に通じる。ヨシュアがアマレクの軍勢と戦った際に、モーセは神の杖を手にして祈っていた⁹。出エジプト記17章9-13節は以下のとおり。

モーセはヨシュアに言った。「男たちを選び、出て行ってアマレクと戦いなさい。私は明日、神の杖を手を持って、丘の頂に立ちます」。ヨシュアはモーセが言ったとおりにして、アマレクと戦った。モーセとアロンとフルは丘の頂に登った。モーセが手を高く上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を下ろすとアマレクが優勢になった。モーセの手が重くなると、彼らは石を取り、それをモーセの足もとに置いた。モーセはその上に腰掛け、アロンとフルは、一人はこちらから、一人はあちらから、モーセの手を支えた。それで彼の両手は日が沈むまで、しっかり上げられていた。ヨシュアは、アマレクとその民を剣の刃で討ち破った。

「祈り」という表現は用いられていないが、モーセは神の杖を手を持って祈っていたと理解できる。少年ダビデがペリシテの巨人ゴリヤテと対決する場面で、今まさ

9 人は跪いて祈ると思いがちかもしれないが、聖書では人が祈る際に立っていることも意外と多い。ヨシュアが率いるイスラエルの軍勢がアマレクと戦っている間、確かにモーセは途中で石に座るが、当初は神の杖を持って立っていた（出エジプト17:9）。山上の説教でも祈る人は立って祈り（マタイ6:5）、「パリサイ人と取税人の祈り」（ルカ18:11、13）のたとえばなしでパリサイ人も取税人も祈る際に立っている。兵士たちが立って戦うことから、霊的な闘いである祈りの際にも立っているものと考えたかもしれない。

に始まろうとするゴリヤテとの戦いについてダビデは、次のように言い表している（Ⅰサムエル 17:45-47）。

ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしたイスラエルの戦陣の神、万軍の**主**の御名によって、おまえに立ち向かう。今日、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを殺しておまえの頭を胴体から離し、今日、ペリシテ人の軍勢の屍を、空の鳥、地の獣に与えてやる。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るだろう。ここに集まっているすべての者も、剣や槍がなくても、**主**が救いをもたらすことを知るだろう。この戦いは**主**の戦いだ。主は、おまえたちをわれわれの手に渡される」。

少年ダビデとペリシテ人ゴリヤテの一騎打ちの場面であるが、ダビデは「イスラエルの戦陣の神、万軍の**主**の御名によって」ゴリヤテに立ち向かうと宣言する。「**主**が救いをもたらすこと」、「この戦いは**主**の戦い」であると主張する。殺し合う、文字通りの戦いではあるが、ダビデとしては**主**の戦いであり、霊的な闘いに他ならなかった。

キリストの兵卒（エペソ人への手紙 6 章 10-20 節）

新約聖書で「立つ」という軍事行為がもっとも顕著な箇所は、「神のすべての武具」で知られるエペソ人への手紙 6 章 10 節から 20 節で、そこには「キリストの兵卒」が描写されている。10 節が冒頭の「終わりに言います。(Τοῦ λοιποῦ)」で導入されていることからわかるように、手紙を締め括る勧告奨励の段落に他ならない。一言で言えば、パウロは霊的な闘いに備えるように奨めている。ここでは、文字通りの戦いではなく、霊的な闘いが思い描かれ、霊的な闘いに備える霊的な武具が「神のすべての武具」として思い描かれている（6:11-12）。

あなたがたが悪魔の策略に対して 立つこと ができるように……私たちにとっての格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。

... πρὸς τὸ δύνασθαι ὑμᾶς στῆναι πρὸς τὰς μεθοδείας τοῦ διαβόλου· ὅτι οὐκ ἔστιν ἡμῖν ἡ πάλη πρὸς αἷμα καὶ σάρκα ἀλλὰ πρὸς τὰς ἀρχάς, πρὸς τὰς ἐξουσίας, πρὸς τοὺς κοσμοκράτορας τοῦ σκότους τούτου, πρὸς τὰ πνευματικὰ τῆς πονηρίας ἐν τοῖς ἐπουρανίοις.

「血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対する」霊的な闘いであることが明記された上で「神のすべての武具」が詳述されている。「すべての武具 (πανοπλία)」とは兵士の完全装備を言い表すギリシア語単語である。「神のすべての武具」に言及した後に、個々の武具が列挙されている (14-17 節)。

あなたがたの腰を真理で締め、正義の胸当てを着けて、平和の福音の備えを両足に履いて、これらすべてに加えて信仰の盾を取って、……救いの兜と御霊の剣を……

... περιζωσάμενοι τὴν ὁσφὺν ὑμῶν ἐν ἀληθείᾳ καὶ ἐνδυσάμενοι τὸν θώρακα τῆς δικαιοσύνης καὶ ὑποδησάμενοι τοὺς πόδας ἐν ἐτοιμασίᾳ τοῦ εὐαγγελίου τῆς εἰρήνης, ἐν πᾶσιν ἀναλαβόντες τὸν θυρεὸν τῆς πίστεως, ... καὶ τὴν περικεφαλαίαν τοῦ σωτηρίου ... καὶ τὴν μάχαιραν τοῦ πνεύματος ...

ローマの重装歩兵の装備に類似している¹⁰。攻撃する兵器である槍や弓矢などには言及がなく、兵器としては唯一剣が言及されている。基本、兵士が自らを攻撃から守る武具が詳述されている。

「神のすべての武具」という霊的な武具の描写が余りにも印象深くて見落とされてきたのかもしれないが、「立つ (ἵστημι)」¹¹ という動詞が3回も繰り返されて強調されている。

6章11節 あなたがたが悪魔の策略に対して立つことができるために、神

10 Ernest Best, *A Critical and Exegetical Commentary on Ephesians* (Edinburgh: T&T Clark International, 1998), 591.

11 新改訳2017版では一貫して「堅く立つ」と訳出されている。必ずしも「立つ」という動作が言い表されているのではないということか。

のすべての武具を着なさい。

ἐνδύσασθε τὴν πανοπλίαν τοῦ θεοῦ πρὸς τὸ δύνασθαι ὑμᾶς στῆναι πρὸς τὰς μεθοδείας τοῦ διαβόλου・

6章13節 このことの故に、邪悪な日に対抗すること¹²ができ、すべてを成し遂げて立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。

διὰ τοῦτο ἀναλάβετε τὴν πανοπλίαν τοῦ θεοῦ, ἵνα δυνηθῇτε ἀντιστῆναι ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῇ πονηρᾷ καὶ ἅπαντα κατεργασάμενοι στῆναι・

6章14節 それゆえ、あなたがたの腰を真理で締め、正義の胸当てを着けて立ちなさい。

στῆτε στῆτε οὖν περιζωσάμενοι τὴν ὀσφὺν ὑμῶν ἐν ἀληθείᾳ καὶ ἐνδυσάμενοι τὸν θώρακα τῆς δικαιοσύνης

キリストの兵卒の武具の描写という文脈で「立つ」という行為が強調されていることは意外かもしれないが、当時の兵士たちが戦場で戦うときに実際に立っていることが多かったことが一番明確な理由であろう。しかも匍匐前進することは「すべての武具」を身に着けた兵士たちには困難であった。戦線を堅持する意味で兵士たちは立っている姿を思い描くことができる。既に見たとおりに、「立つ」は「逃げる」の反意語として用いられることが多い。敵の軍隊が接近してきて怖くなった兵士たちが敵前逃亡するのではなく、戦線を持ち堪えることを言い表す際に「立つ」が用いられた。

「神のすべての武具」の中に祈りが入っていないことは意外かもしれないが、18節以降でパウロは祈りの支援を要請している。ギリシア語本文では18節から新しい段落が始まり、新改訳2017版などの翻訳聖書で独立した文として訳出されている¹³が、18節以降に主動詞はなく分詞構文である。18節は前節の動詞「取りなさ

12 「対抗すること (ἀντιστῆναι)」にも「立つ」という動詞が隠されている。

13 新改訳2017版では分詞 *προσευχόμενοι* が「～祈りなさい」と命令的分詞 (commanding participle) として訳出されている。ローマ12:9-11 および S. E. Porter, *Idioms of the*

い (δέξασθε)」に従属すると理解することも文法的には可能である。

そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒たちと私のために、忍耐の限りを尽くして、あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈って、救いのかぶとと神の言葉である御霊の剣を取りなさい。

καὶ τὴν περικεφαλαίαν τοῦ σωτηρίου δέξασθε καὶ τὴν μάχαιραν τοῦ πνεύματος, ὃ ἐστὶν ῥῆμα θεοῦ. διὰ πάσης προσευχῆς καὶ δεήσεως προσευχόμενοι ἐν παντὶ καιρῷ ἐν πνεύματι, καὶ εἰς αὐτὸ ἀγρυπνοῦντες ἐν πάσῃ προσκαρτερήσῃ καὶ δεήσει περὶ πάντων τῶν ἁγίων καὶ ὑπὲρ ἐμοῦ, . . .

たとい通常の理解に則って、分詞 *προσευχόμενοι* を命令的分詞として「祈りなさい」と理解したとしても¹⁴、祈りが「神のすべての武具」と密接な関係にあることは間違いない。祈りは「すべての武具」のひとつに喩えられてはいないが、「すべての武具」のひとつに数えられていると言うことができるかもしれない。

「市民」の戦いか（ピリピ人への手紙 1 章 27-28 節）

ピリピ人への手紙では、パウロは 27 節目になって初めて 2 人称複数の命令法で宛先の人たちに語りかけている¹⁵。

ただキリストの福音にふさわしく市民生活をしなさい。
それは、私が行ってあなたがたに会うにしても、
離れているにしても、
あなたがたについて、あなたがたが靈魂を一つにして福音の信仰のためにと
もに闘っていて、
どのような状況でも反対者たちに脅かされることなく、

Greek New Testament (Sheffield: JSOT, 1999), 185-86. を参照のこと。

14 Best は 18 節の *δέξασθε* を跳び越えて 14 節の *στήτε* に遡って従属していると注解する (*Ephesians*, 604)。その解釈が意味の上では一番良いことは言うまでもない。

15 Ben Witherington III は 1:27-30 を *propositio* (要約) とする (*Paul's Letter to the Philippians: A Socio-Rhetorical Commentary* [Grand Rapids: Eerdmans, 2011], 29)。

あなたがたは霊を一つにして¹⁶立っていると私が聞くためです。
そのことは、彼らにとっては滅びのしるし、
あなたがたの救いの（しるし）です。
これは神から出たことです。（1:27-28）

Μόνον ἀξίως τοῦ εὐαγγελίου τοῦ Χριστοῦ πολιτεύεσθε,
ἵνα εἴτε ἐλθὼν καὶ ἰδὼν ὑμᾶς
εἴτε ἀπὸν
ἀκούω τὰ περὶ ὑμῶν, ὅτι ¹⁷στήκετε ἐν ἐνὶ πνεύματι,
μιᾷ ψυχῇ συναθλοῦντες τῇ πίστει τοῦ εὐαγγελίου
καὶ μὴ πτυρόμενοι ἐν μηδενὶ ὑπὸ τῶν ἀντικειμένων,
ἧτις ἐστὶν αὐτοῖς ἔνδειξις ἀπωλείας,
ὑμῶν δὲ σωτηρίας,
καὶ τοῦτο ἀπὸ θεοῦ·（1:27-28）

パウロは先ず、ピリピのキリスト者たちに、キリストの福音にふさわしく市民生活を送るように（*πολιτεύεσθε*）と命じている。その上で、その中身である市民の責務¹⁶について説明している。先ず「あなたがたは霊を一つにして立っている（*στήκετε ἐν ἐνὶ πνεύματι*¹⁷）」と述べてから、「霊魂を一つにして福音の信仰のためにともに闘って（*μιᾷ ψυχῇ συναθλοῦντες τῇ πίστει τοῦ εὐαγγελίου*）」、「どのような状況でも反対する者たちに脅かされることなく（*μὴ πτυρόμενοι ἐν μηδενὶ ὑπὸ τῶν ἀντικειμένων*）」と2つの分詞構文で説明されている。「霊を一つにして（*ἐν ἐνὶ πνεύματι*）」「霊魂を一つにして（*μιᾷ ψυχῇ*）」「ともに闘っている（*συναθλοῦντες*）」と一致が強調されている。「ともに闘っている（*συναθλοῦντες*）」という動詞は、運動競技を含めた様々な闘いのことを意味するが、「脅かす」の反意語として用いられていることから、運動競技よりも戦闘行為が念頭にあると思われる。兵士たちが戦場で戦う際には、敵から攻撃されることを恐れおののくことなく、勇気を奮い立

16 ローマ市民権は、特権であると共に責務が伴った。新約聖書の時代には、もはや特権と言えるものではなかった。それでもローマ市民たちには、裁判なしに鞭で打たれることはなく、また皇帝に直訴する権利が認められていた。

17 この霊（*πνεῦμα*）が人間論の霊か神の御霊、聖霊のことか決めかねている。

たせて戦わなければならなかった¹⁸。

この「あなたがたは霊を一つにして立っている」と述べてから、「靈魂を一つにして福音の信仰のためにともに闘っている」「どのような状況でも反対する者たちに脅かされることなく」という分詞構文を独立に別個に理解しようとする和不確かかもしれない。しかし、先ず27節前半で市民生活(πολιτεύομαι)に言及があった上で、この三つの表現があることは重要である。四つの言い回しを考え合わせて理解しようとなると、戦場の戦闘に関連した状況が描写されていると理解することが妥当だと思われる¹⁹。近代の戦争で兵士たちは戦闘中の戦場で、匍匐前進することが普通であるが、古代の戦争では、近現代の戦争と兵器や武具の種類が異なるために、兵士たちが戦場で取る姿勢も異なっていた。防衛線上に完全装備の武具を身に着けて兵器を構えた兵士たちが密集して立ち並んで、その防衛線を死守する様子が思い描かれている。場合によっては、その防衛線から徐々に前進することが重要な戦法であった。その際に、兵士たちが一糸乱れず一致して行動することが何よりも重要であった。兵士たちが文字通りに「霊を一つにして立っている」ことが求められた。密集して立って、敵軍を迎え撃とうとする際に、兵士の誰かひとりが迫ってくる敵に怯えたり、怖がったりして戦線を離脱すると、防衛線に乱れが生じて、味方の軍隊は総崩れになりかねなかった。「救い(σωτηρία)」と「滅び(ἀπώλεια)」が28節後半で言及されているが、魂の救いと滅びだけではなく、文字通りの戦場での身の安全と死も指す語句である。兵士たちは、まさに自らの身の安全(σωτηρία)を守ることができるか、身を滅ぼすか(ἀπώλεια)戦場で常に背中合わせであった。しかも古代ギリシアのアテネなどでは民主主義が発達した関係で、市民たちが自分たちの国である都市を自らの手で守る市民皆兵制度が原則であった。

勿論、パウロがピリピ人への手紙1章27節-28節で描いている闘いは、文字通りの戦いではなく、霊的な闘いのことである。霊的な闘いと一口に言っても様々な霊的な闘いが想定できる。「反対する者たち」と複数形で言い表されていることから、

18 Mark J. Keown, *Philippians 1:1-2:18: Evangelical Exegetical Commentary* (Bellingham: Lexham Press, 2017), 279, 290-91, 302-04.

19 Joseph B. Lightfoot は捕虜が犯罪者に身を落とした「剣闘士」が円形闘技場で闘わせられるメタファーであると注解する (*St. Paul's Epistle to the Philippians: A Revised Text with Introduction, Notes and Dissertations* [repr. ed., Lynn: Hendrickson Publishers, 1981], 106.) が、「霊を一つにして」「靈魂を一つにして」「ともに闘う」と一致が強調されていることを考慮すると、兵士たちが戦場で戦う場面を思い描いていると理解する方が妥当である。

エペソ人への手紙で思い描かれているような諸霊の頭であるサタンとの闘いという意味での霊的な闘いではなく、ピリピ人への手紙では迫害や弾圧という、人が敵対する形で霊的な闘いが想定されている。古代の戦争を描写する表現を比喩的に用いてパウロがピリピのキリスト者たちに奨励している。以上のような1章27節理解を踏まえると、4章1節でパウロが「ですから、私の愛すべき、恋い慕う兄弟たちよ、私の喜び、そして冠よ、このように主にあって立っていなさい、愛する者たちよ。(*Ὡστε, ἀδελφοί μου ἀγαπητοὶ καὶ ἐπιπόθῃτοι, χαρὰ καὶ στέφανός μου, οὕτως στήκετε ἐν κυρίῳ, ἀγαπητοί.*)」と記したときにもキリストの兵卒たちが集団として戦線を固守するイメージをパウロは思い描いていたものと思われる。

終わりに

新約聖書、とりわけパウロ書簡の奨励では「(しっかり) 立っていなさい」という表現がたびたび見られる。必ずしも、そのすべてが軍事的行為として「立つ」を思い描いていると断定するつもりはない。ただエペソ人への手紙6章やピリピ人への手紙1章を中心にして相当数の用例で軍事的なイメージが比喩として用いられている蓋然性は高い。人が「立つ」状況として様々な状況が想定でき、実際に聖書内にも様々な意味で「立つ」が用いられている。例えば、詩篇134篇1節は新改訳2017版で「さあ 主をほめたたえよ。主のすべてのしもべたち 夜ごとに主の家で仕える者たちよ」と訳されている。ここで「仕える者たち」と訳出されている動詞の分詞形は直訳で「立っている者たち (*םִּתְּחַנְּנִי הַלְלוֹתֵי הַיָּהּ*)」である。主の家である神殿で奉仕する祭司たちは立って奉仕したので、「立つ」という動詞が「仕える・奉仕する」意で用いられ、そのように訳出されている²⁰。

冒頭で触れた詩篇106篇でモーセは祈っている。もしかすると、城壁の破れ口に立って防戦する兵士たちを思い描きながら、モーセが霊的な闘いである祈りに専念しているので、詩篇詩人は、当然のことモーセが立っていると連想したのかもしれない。その上で、比喩的な「破れ口」が組み合わせられて詩篇106篇の言い回しとなったかもしれない。あくまでも、これは想像の域を出ないが、全く根拠がないとは思われない。

この他にも、律法の専門家がイエスを試みようといきかける際に立ち上がってい

20 詩篇135篇2節も同様の表現と文脈である。

る (ἀνέστη ルカ 10:25)。悪行を悔い改めたザアカイは「立ち上がって (σταθεις)」主イエスに、過去の罪状を告白して弁償する意思を表明している。パウロは、私たちは信仰によって、この恵みのうちに立っている (ἐστήκαμεν) (ローマ 5:2) と言い、ヤコブは「見よ、さばく方が戸口に立っている (ἰδοὺ ὁ κριτὴς πρὸ τῶν θυρῶν ἕστηκεν)」(ヤコブ 5:9b) と述べている。様々な状況で様々な意味合いで「立つ」という動作に言及されている。

と同時に聖書の中には戦場で戦闘に従事する兵士たちが立っていて、キリスト者が霊的な闘いに携わったり、祈ったりする際に、立っている、と思い描かれることも確認できた。そして、何よりも個々の言語表現の背後には様々なイメージがあり、ひとつのイメージから別のイメージに結び付けられていく過程を垣間見ることができた。古代世界で兵士たちが戦場で戦う際には匍匐前進するのではなく、立っていた。旧約聖書では、文字通りの戦争でも、主の戦いとしてイスラエルの神主が御民イスラエルのために戦うと理解され、そのために祈りが献げられた。主は、祈りに答えて、戦場でも神の民を助けなされた。以上のような様々な背景要素から新約聖書に見られる霊的な闘いの描写が成り立っている。